

扇谷山 海蔵寺略縁記



〒248-0011 鎌倉市扇ヶ谷4丁目18番8号
電話 (0467) 22-3175



仏殿（薬師堂）

寺の略史

海蔵寺は古都鎌倉の扇ヶ谷の北、風光明媚な沃間（沃間）にたつ七福臨済宗建長寺派の古刹である。もと真言宗の寺跡であるこの沃に、建長五年（一一五三）宗尊親王の命によって徒五位前能州太守藤原仲能が本願主となり、七堂伽藍が再建された。しかし、元弘三年（一一三三）鎌倉幕府滅亡のおりに烏有に帰した後、応永元年（一一三九）四月、鎌倉御所足利氏満の命により上杉氏定が再建したのが、海蔵寺である。氏定は源翁禪師（心昭空外）を開山に招いて菩提寺とした。天正五年（一五七七）建長寺に属し今日に至っている。寛政三年（一七九一）の境内図によると、主な建物の配置は現在の姿とほとんど変わらず、塔頭（塔頭）七ヶ院の名と旧跡を图示している。

本堂（龍護殿）は大正十二年（一九二三）の震災で倒壊したのち同十四年の再建。内殿欄間の雲龍彫は文化九年（一一八二）、額は延宝九年（一六八一）靈芝の筆。間切戸の雲龍・山水の絵は狩野探信の筆になり、正面四枚戸の牡丹唐獅子の絵は藤原義信の筆。

仏殿（薬師堂）は安永五年（一七七六）浄智寺から移築し、翌年入仏供養を行った。薬師三尊像（鎌倉市指定文化財）、十二神将像・伽藍神像などを安置する。



薬師三尊像

薬師如来
像と伝説

薬師如来像は仏殿の本尊で別に暗薬師・
児議薬師ともい、胎内には土中から発掘
されたという古い仏面を納めている。

ある年のこと、寺の背後の山麓から何とも悲しげな赤
児の啼き声が、毎夜のように開山禪師の耳をとらえた。
開山が声の主をたずねていくと、啼き声は古はけた墓石
の下から聞える。しかも、薬城からは金色の光がもれ輝
き、あたりに芳香がただよっていた。

そこで開山は、おもむろに経を読み、袈裟をぬいで墓
を覆ってみると、不思議にも赤児の啼き声が止んでしま
う。翌日、人を遣わしてその所を探ってみると、立派な
薬師様の御顔を得たのだった。

奇矯なことだと深く感じた開山は、新たに薬師如来像
を造立し、発掘した御顔を胎内に納めて祀ることにした
のである。以来、胸中の像は六十一年目に開張するのを
慣わしにして今日に至った。

三尊像は弘化三年（一八四六）三月、鎌倉仏師三橋氏
が修理を施している。薬師如来像の眷属である十二神將
像も安永七年前から天明元年（一七八一）にかけて仏
師三橋永助康運によって造立されたものである。



加藍神像



開山像

開山と殺生石

開山源鏡禪師は心昭空界といひ、那須野の殺生石の伝説で名高い。禪師は越前(福井県)の人で、福島会津の示現寺に二十六年間止住したのち、建長寺の大覚禪師に参禅、修学、ついで海蔵寺の再建のおり開山に迎えられた。

開山にまつわる下野国(栃木県)那須野ヶ原の殺生石をくだいた話は、謡曲の「殺生石」にも語られている。

昔、鳥羽天皇が奇怪な病気に悩まされた原因が瀛姫五藻の前に化けていた白狐の仕業とわかるや、白狐は東国下野に逃走した。天皇は、三浦義明をもってこれを那須野原に殺させたが、のちに、白狐の霊は石と化して人々を苦しめ始める。石にさわったすべての生物が死んでしまふので、当時の人々は、これを殺生石とよんで恐れおののいたという。

そこで開山禪師が登場する。開山は那須野に脚を入れると殺生石の辺りには白骨が山のようになっていた。禪師はおもむろに経文をとこなえながら念力をこめた杖をもって石に一撃を加えると、石はたちまち砕け散り、以来、石の霊は成仏して人々は安穩に暮すことができたというのである。だから、かなづちを新に女能と称するのは、この伝説に由来するわけである。



古位牌



板碑

板碑と古位牌

ともに当寺の代表的な寺宝の一つで、鎌倉市指定の文化財である。

阿弥陀三尊来迎図板碑は嘉元四年（一一三〇）八月の年紀をもつ鎌倉の板碑を代表する優れた作品である。もと当寺十六ノ井戸の奥壁左側にはまっていたもので、昭和初年ごろまでは割れていなかった。

尊像を線彫・浮彫などの手法で塗面風に描き、冷い石に刻んだにもかかわらず温みとやさしさが伝わってくる。三尊像の下方に供えられた二つの華瓶も素材で趣きがある。鎌倉では、この板碑と同類の完形品はないので、貴重な歴史的文化遺品ということになる。なお、当寺には別に永和三年（一一三七）八月銘の阿弥陀一尊図板碑（市文化財）を伝えているが、二点とも鎌倉国史館に寄託中。

古位牌も木造の大形位牌として貴重かつ珍しい寺宝で、鎌倉では当寺に遺るだけである。応永三十年（一四三二）春の彼岸供養のさい、当寺に尽力した人々などの多くの霊（八万四千霊）を申し、祠堂に安置されたものであろう。後世、一基の裏面に永正十二年（一一五一）の年紀があり、同様に供養したことがわかる。なお、建長寺肯綮の「宋だるきやぐら」にはこの位牌と全く同形の二基の浮彫がある。私殿安置。



十六井戸

十六井戸

境内の雨の隅の岩窟中にある鎌倉時代の井戸。窟の中央に石造の観音菩薩像をまつり、その下方に弘法大師像を安置する。井戸の名は窟底に径七十^{cm}、深四・五十^{cm}くらい井十六穴がおのおの清冽な水をたたえているのになむ。

伝承では金剛功德水と名づけられ、観音菩薩が中興關山に夢に告げて曰く「末世の衆生信心つたなくして身に弊病をうけて定業を終えずして死す、故に弘法大師に告げ、金剛功德水を以て加持し、この水を授け、業を煎じて与えれば、悪病ことごとく消除けたのだが、鎌倉は数度の天災のためこの井埋れり、禪師願くはこの井を掘り出し掃除をなせば、清水湧き出で再び靈驗あらわれんと、夢から覚めた禪師がその通りにすると観音菩薩像が出現し、窟中の水を加持し衆生に施したところ靈驗あらなかつた。

察するに、その数十六とは、十六(金剛)菩薩(薩・王・愛・喜・寶・光・幢・笑・法・利・因・語・業・護・牙・拳の各菩薩)を表現しているもので、その菩薩に供え捧げる水が円伽という功德水である。

一部の歴史家には墓所と称する説もあるが、湧水地と十六という数字を思えば、墓所とは考えられない。

なお、扉石壁に黄檗宗万福寺水庵禪師の偈がある。



庭 園

庭園

本堂と庫裡の背後に作庭された禅宗風の庭園といえる庭園を造ったが、その心構えは、自然のよい所を自分のものとして作庭するところにあった。これが基本であり、ほかに「乞はんに従う」という言葉どおり、自然の地形や岩石・樹木の要求にしたがつて石を置き、樹を植え、作者自身の心中の自然を表現しようとしたのである。自力宗である禅宗の自然観が、ここにみられるわけで、禅寺で最も禅宗らしく感じられる所が庭園だといわれるゆえんでもある。

当寺の庭園も、まさにその通りで、まず、当寺が風光明媚な景勝の溪間に造営されていることが大事な要素である。庭は「心字池」を中心に何の変哲もない石が、それぞれ、「心」という生命を与えられて雪見燈籠などと共に池週にたたずみ、樹間にはひっそりと石の五重塔も配されている。

松竹梅や紅葉の樹、つつじなど、さまざまな樹木・草花が四季おりおりの風情をかもし出し、池水は四季を通じて枯渴することなく、自然の湧水がこれを満してくれらる。いわば、禅の不動心を表象しているようでもある。

月見台から望む風景は、まさに一幅の絵画であり、泉石は観る者の心を養ってくれる。

鎌倉十三仏霊場

第七仏札所

鎌倉三十三ヶ所観音霊場

第二十六番札所

鎌倉二十四ヶ所地藏霊場

第十五番札所

相模国二十一ヶ所弘法大師霊場

第五番札所

東国花の寺百ヶ寺

第九十六番札所

臨濟宗

建長寺派

扇谷山 海蔵禪寺

建物

一、書院 昭和五年一月建立 一棟

一、庫裡 天明五年（一七八五）三月上旬棟 一棟

一、山門 平成十五年（二〇〇三）再建。 一棟

室町期禅宗様式四脚門、額は前南禅

美中の書、天和二年（一六八二）の銘。

一、鐘堂 昭和三十八年建立。鐘は無乳型。 一棟

一、岩船地藏堂 源頼朝の息女大姫の守本尊であ

る岩船地藏尊を安置。床下に石仏あ

り。日本三大岩船地藏の一つ。

遺跡

一、真観の井 金沢頼時の室、尼となり無著禅尼と号

し。仏光禅師に参禅。無著禅尼の悟り歌「千代能

がいたたく桶の底脱けて、水たまらねば月もや

どらじ」より名づく。鎌倉十井の一つ。

一、寂外谷 源頼朝切通そうとして中止。当寺裏山。

一、平景清土牢跡 化粧坂入口山王堂口にあり

一、道知塚 当寺本願主藤原仲能（道知禅師）の墓